The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	“If I could have it back, all the time that we wasted I’d only waste it again” : Arcade Fire, The Suburbs における郊外のノスタルジー
Author(s)	桑原, 拓也
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 19-31
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84998
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

“If I could have it back, all the time that we wasted, I’d only waste it again”[1]

——Arcade Fire, *The Suburbs* における郊外のノスタルジー——

桑 原　拓 也

１．変化するグラミー賞と Arcade Fire

2011 年 2 月 13 日、Arcade Fire の *The Suburbs* が第 53 回グラミー賞の年間最優秀アルバムに選ばれた。Lady Gaga や Katy Perry といったポップ界のスターや、最も成功したラッパーの一人である Eminem、さらにカントリー・バンドとして高い売上を記録した Lady Antebellum (現在は Lady A に改名) を抑えて、インディー・ロック・バンドである Arcade Fire による作品がグラミー賞で最も注目される賞を受賞した。Arcade Fire は、アメリカ人の Win Butler と彼の妻でカナダ人の Régine Chassagne、Win の弟 Will Butler らを中心にカナダで結成されたロック・バンドであり、ジャンルを越境する楽曲と情熱的なパフォーマンスで急速に知名度を増した。Arcade Fire は 2004 年の 1st アルバム *Funeral*、さらに 2007 年の 2nd アルバム *Neon Bible* でグラミー賞のオルタナティブ・アルバム部門にノミネートされたことはあったが、インディー・レーベルに所属していることもあり、大衆的に広く知られたバンドではなかったため、彼らの受賞は大きな話題とともに受け入れられた。例えば、イギリスの大手音楽メディアの NME は “Grammy Awards Fallout - Who the Hell Are Arcade Fire?” と題した記事を出し、Arcade Fire がアメリカでほとんど聞かれていないことを示し、“They’re just too anonymous” と述べた。さらに続けて、Arcade Fire の受賞は “It’s a fascinating window into the astonishingly closed-minded world of mainstream America” と皮肉を込めて述べている。

しかし一方で、Arcade Fire の年間最優秀アルバム賞の受賞以降、インディー・レーベルに所属するミュージシャンの受賞やノミネートは増加していった。Billboard は、“Throughout the 2010s, the Grammys have been kind to independent music in unprecedented ways” (Payne) と 2010 年代前半のグラミー賞の傾向を総括した。その言葉通り、2012 年のグラミー賞では、インディー・レーベルに所属する Bon Iver が新人賞を受賞し、さらに年間最優秀レコードにノミネートされている。また、2013 年には、Fun. が年間最優秀楽曲賞と新人賞を受賞し、インディペンデント系の R&B レーベルに所属する Frank Ocean も年間最優秀アルバム賞と

[1] Arcade Fire の楽曲 “The Suburbs (Continued)” より。

新人賞にノミネートされた。グラミー賞の寛容な態度は、様々な要因と力学が働いた結果ではあるにせよ、Arcade Fire の受賞から始まったといえるだろう。

インディー系のミュージシャンの躍進がアメリカの音楽受容における新たな変化を示している一方で、*The Suburbs* のコンセプトは今までアメリカを形成してきた郊外文化の終焉とその残滓的なものに対するノスタルジーである。*The Suburbs* の受賞はポピュラーミュージックの隆盛に貢献したと同時に、極めてアメリカ的な文化のひとつが消えつつあることを示唆している。しかし、そこには単なるノスタルジーだけではなく、アメリカの経済格差や機会不平等といった社会的な側面も確かに感じられる。よって、本稿では、Arcade Fire が *The Suburbs* というコンセプト・アルバムを通して、郊外への憧憬とその背後にある社会問題を表象していることを明らかにしたい。

２．アメリカにおける郊外とは何か？

アメリカの歴史と文化を語る際に、郊外の誕生と発展は避けて通れない。その意味で、2007 年に発生したサブプライムローン問題を端緒とするリーマンショックは、郊外文化に極めて大きな損害を与えた。*The End of the Suburbs* を著した Leigh Gallagher によると、今までは都市部に比べて郊外の住宅の価格は常に優位であったが、2011 年には都市部と郊外の価格差は逆転している (18-19)。さらに、郊外と比べた際に、都市部の治安は常に不安定であったが、殺人事件の件数はむしろ郊外の方が増加している (19-20) と Gallagher は指摘する。これらの要因に加えて、Gallagher は、郊外の地位の低下について、運転免許証の取得率の低下やガソリン価格の高騰、通勤時間の超過といった理由を挙げている。Gallagher は、上記の理由によって、 “Simply speaking, more and more Americans don’t want to live there anymore” (11) と述べる。つまり、アメリカの郊外離れは、リーマンショックがその一因であったとはいえ、歴史的に徐々に進行していったと考えられる。

郊外離れの理由を検討するために、まず郊外の歴史を概観していく。アメリカで明確に郊外の文化が発達した時期は定かではないが、おおむね 1910 年代に自動車が発明された時期と郊外の発達は一致する。言い換えると、鉄道や市電の駅の周辺に居住せざるを得なかった労働者が、自動車の発達と普及によって、衛生的な環境と低い犯罪率を備える郊外に居住していったことが郊外の発達の契機になった。その後、1940 年代から 1950 年代にかけて郊外の範囲は飛躍的に拡大し、レヴィットタウン (Levittown) などに代表される巨大な住宅地が開発されていった。[2] この開発の背景には、1929 年の大恐慌以来の住宅不足がある。第二次世界大戦の終結後に帰還兵が帰国したことで、住宅不足が顕著になったのである。その後の開発によって、1950 年代以降になると住宅不足は解消されたが、1970 年代には住

[2] レヴィットタウンは郊外向けの住居を大量生産することで、既存の住宅とは異なり、パターン化された住宅を安価で提供することができた。

宅と土地を対象にした投機が高まり、その結果として、アメリカの郊外に特徴的なスプロール (Sprawl) と呼ばれる、郊外の居住区の著しい拡大が見られた。[3]

こうした郊外の拡大の要因は、Bernadette Hanlon が指摘するように、住宅の所有とアメリカン・ドリームの実現が結びついたことである。最もよく知られたアメリカン・ドリームの定義は、James Truslow Adams による "dream of a land in which life should be better and richer and fuller for every man, with opportunity for each according to his ability or achievement" (404) だろう。これを踏まえて、Hanlon は "a house and an automobile in the suburbs were viewed as marks of success, achievements of the American Dream" (2) と指摘している。実際にアメリカン・ドリームの理念が実現されているか否かという議論にここでは立ち入らないが、すべての個人が具体的な成功の形として住宅を所有する機会を持つことは、ひとつのアメリカン・ドリームの実現だといえよう。この点で、アメリカにおいて郊外で住宅を所有することは、 "a potent symbol of middle-class values and lifestyle" (Hanlon 15) になった。土地や住宅所有の願望と経済の好況を背景にした中産階級の増加が、郊外の発展を支えていたのである。

しかし、数度の停滞を経験しながら 1940 年代から続いた郊外の発展も、2000 年に近づくにつれて終焉を迎えることになる。郊外の変化の徴候は 1970 年後半から見られたが、郊外の発展に決定的なダメージを与えた出来事は、2007 年に表面化したサブプライムローン問題に伴う一連の経済不況である。[4] 従来の住宅ローンは顧客の信用度や社会的地位、収入などを総合的に判断していたが、1990 年代から徐々に増加したサブプライムローンは、本来であれば住宅ローンを組むことができない人々に住宅購入の機会を提供した。その結果として、返済不能な住宅ローンを抱える住民が急速に増加し、2007 年には、住民が住宅を追われる形でバブルの崩壊が顕在化しつつあった。2008 年には、サブプライムローンの関連債券を多数抱えていた全米大手の投資銀行リーマン・ブラザーズ社が破綻し、2000 年代半ばの住宅バブルは完全に崩壊することとなった。その結果、郊外の住宅には多数の空き家が出現し、郊外に住宅を所有するという夢は一旦崩壊したのである。この状況はまさに "Once symbolic of the American Dream, some have now become America's nightmare" (Hanlon 4) だといえるだろう。

しかし、Becky Nicolaides と Andrew Wiese は、郊外離れや都市への回帰は部分的なムーブメントにすぎず、多くのアメリカ人は現在でも郊外の住宅を求めていると指摘する。特に、金融危機が落ち着いた現在では、再び郊外での生活を志向する人々が増加しつつある ("a

---

[3] スプロールについて、Andres Duany らは、ヨーロッパや 1970 年代以前の郊外を伝統的で歩行者の利便性を重視していたとみなす一方で、スプロールは人工的かつ合理的であり、歩行者より自動車を優先したことで、少なくない数の人々に悪影響を与えたと指摘する (19-20)。特に、車を使うことができない子どもや老人は、郊外の外に出ることが難しくなったとされる。

[4] また、Rachel Heiman は、1990 年代の IT バブル、いわゆるドットコム・バブルが弾けたあとの経済不況により、郊外に住宅を所有していた中流階級の生活が徐々に悪化していったと指摘する (1)。

return of suburban growth") と指摘し、さらに、新たな郊外居住者は多様化しており、かつての白人中心的な郊外の風景ではなくなりつつあるという—— "Immigrants, young families, seniors emotionally attached to their homes, and others continued gravitating toward suburban homeplaces, for a host of reasons—whether good schools, nostalgia, ethnic familiarity, jobs, or few good alternatives"。また、ある批評は新型コロナウイルスの影響によって、他人との距離を広く確保できる郊外が再び注目されていると指摘する—— "suburbanites have protected their families amid the solace of sprawling homes on large, private plots, separated from the neighbors, and reachable only by the safety of private cars. Sheltered from the virus in their many bedrooms, they sleep soundly, dreaming the American dream with new confidence" (Bogost)。こうした現状を踏まえると、アメリカの郊外はサブプライムローン問題から派生する金融危機によって大きな損害を被ったが、決して廃れたのではなく、別の形態をとって今後も発展する可能性を持っている。[5] 今なお、アメリカにとって郊外は魅力を持った空間であるのだ。

3．変わりゆく郊外と *The Suburbs*

Arcade Fire の中心人物にしてメインボーカルを務める Win Butler は、*The Suburbs* のコンセプトについて、"the parts of the album that are autobiographical were inspired by growing up in the suburbs of Houston" (Dombal) と語っている。1980 年生まれの Win は、弟でありバンドメンバーの Will (1982 年生まれ) とともに、アメリカのスプロールの中で、少年期から 10 代半ばまでの時期を過ごした。[6] ヒューストン郊外 The Woodlands での Butler 兄弟の経験は、アルバムの制作とともに撮影された Spike Jones による短編映画 *Scenes from the Suburbs* によく反映されている。この短編映画は、演技経験がない 10 代半ばの少年少女たちを通して、郊外で発生した謎の内戦を背景に、郊外で暮らす若者たちの日常を 30 分ほどにまとめている。さらに、この短編映画を断片的に編集したアルバムのリードトラック "The Suburbs" のプロモーション・ビデオもアルバムの世界観を補強している。よって、*The Suburbs* は、変化する郊外の風景を、音楽と映像で総合的に表象した作品であるということができるだろう。

こうした映像と音楽によって、*The Suburbs* は、郊外の生活を歌うだけでなく、郊外に対する哀愁と失われつつある風景を音像として捉えることを試みている。その中で、アルバムの中核を貫くテーマが戦争である。リードトラックの "The Suburbs" には "in a suburban war" という表現が出現し、トラック 9 のタイトルは "Suburban War" であり、さらにボーナストラックには "Culture War" という曲も収録されている。注目すべき点は、これらの戦

[5] 特に、1980 年代から注目されたニュー・アーバニズムがある。今までの自動車依存の郊外から脱却し、鉄道駅を中心に町を発展させる考えである。

[6] Win Butler はその後、第 14 代アメリカ大統領の Franklin Pierce や Facebook の創設者 Mark Zuckerberg などの著名人を多数輩出するニューハンプシャー州の Phillips Exeter Academy に進んでいるため、実際に The Woodlands に居住していた期間は長く見積もっても 10 年ほどだと考えられる。Paul Morley を参照。

争が実際の戦争や具体的な戦争を指示しているのではなく、郊外で生じつつあった多様な変動を抽象的に示していることだ。より具体的にいうならば、この変動は、白人中心的で中産階級の自己実現の場としての郊外から、徐々に多人種を受容しつつも、富の一極集中が急速に進行したために失われつつあった中産階級にとっての最後の郊外を示唆している。2016 年にトランプ政権が誕生したことで普及した「分断」という言葉を先取りするように、徐々に可視化されていった郊外の白人中流層の低迷と没落を捉えたアルバムだということができるだろう。

こうした背景のもとで、このアルバムで焦点が当てられるのは、ティーンネイジャーである。Win Butler の妻 Régine は、郊外と若者の関係性について、あるインタビューで次のように語る—— "For example, the feeling when you're very young that suburbs are kind of nice because there's a little park to go to and it's safe, but then you grow up and as a teenager it seems kind of dead and you feel like you want to get out of there" (Cottingham)。ティーンネイジャーは、成長に合わせて郊外の変動と自身の内面の変化を段階的に感じ取る。そのため、幼少期の時点で安全な遊び場だった郊外は、年齢を重ねるにつれて、退屈で閉塞感に満ちた場所に感じられる。*The Suburbs* において焦点化されるのは、ティーンネイジャーと呼ばれる年代の若者たちが郊外で起きた多種多様な対立を目の当たりにし、彼ら/彼女らも、自身の内面と自身を拘束する外界に対して戦争を仕掛けていく様子である。例えば、Andres Duany は、郊外で育った子どもたちは "the 'cul-de-sac kid,' the child who live as a prisoner of a thoroughly safe and unchallenging environment" (116) であると述べ、その結果、 "children and adolescents are unable to practice at becoming adults" (116) と指摘する。このように、ティーンネイジャーを取り巻く郊外の環境は、その成長段階によって変化し、最終的に成長を阻害しうる要因になるのである。

例えば、文学では、郊外の理想的な教育モデルに対するティーンネイジャーの抵抗が描かれてきた。Jeffrey Eugenides が 1993 年に出版し、1970 年代のデトロイト郊外を舞台にした *The Virgin Suicides* は、かつての郊外に典型的な "the old myth of a safe, idyllic neighborhood" (George 186) の崩壊を、四人姉妹の連続的な自殺を通して描き出す。また、2017 年には Celeste Ng が *Little Fires Everywhere* において、1990 年代のオハイオ州クリーブランド郊外の Shaker Heights を舞台に、白人家族とアジア系移民の親密だが微妙な関係の末に起きた放火を描いている。この二作品は、 "cul-de-sac kids" として育った郊外のティーンネイジャーによる郊外の神話に対する抵抗と反発が激化したものだと読むことができる。しかし、それ以上に、両者は郊外における新たな役割と関係性に適応できない大人たちの姿を示してきた。変化していく郊外に対するティーンネイジャーの反発は、郊外の旧来の神話が別の段階に移行しつつある様子を明確に描写している。

この二作品の舞台となった 1970 年代から 1990 年代をモチーフにしたと推測される *The Suburbs* において、こうしたティーンネイジャーの内面の閉塞感は、短編映画 *Scenes from the Suburbs* によく映し出されている。この短編映画では、架空の郊外を舞台に、15 歳前後の数

名の若者を中心に撮影される。その中でも、語り手を担うKyleとその親友のWinter Miller が中心人物になる。この短編映画に明確なストーリーはなく、地区によって分断された郊外や覆面をかぶった軍隊、Winterの変貌を、Kyleの目線から断片的に映していく構成をとる。映画の背景は、Kyleによる "When I think back about that summer, I don't think much about the army. There was always some sort of conflict going on. Towns would attack each other. If a golf course was built too close to a border. Or if a shopping centre gave off too much light pollution" (00:13-0026) という冒頭の語りに集約される。Kyleが育った郊外では、常になんらかの形で対立があり、覆面をかぶった謎の軍隊が常駐している。ここから、郊外の戦争とは、日常的に発生する対立を象徴化したものだと考えられる。

対立が巻き起こる郊外において、KyleとWinterは、映画冒頭で "You guys are in love with each other" (4:15) と呼ばれるほどの友情を築いているが、映画の終盤でWinterはKyleを暴行し、そこで映画は実質的なクライマックスを迎える。WinterがKyleを暴行した理由は明らかにされていないが、いくつかの徴候を読み取ることができる。6:40のシーンで、Winterは仲間たちが乗る自動車から降り、自宅に戻るが、同居している変わり者の兄 Terrance に呼び止められ、戻ることはない。この点から、Winter は家庭に問題を抱えていることが伺える。さらに、場面は変わり、14:55のシーンでは、Winterは夜に焚き火をする仲間たちを尻目に、突如としてフェンスで囲われた町の境界に走り出し、後を追ったKyleとともに軍に捕まってしまう。名前を聞かれても答えないWinterだが、彼の身を案じたKyleは彼の名を答える。それがきっかけとなり、WinterとKyleの間には亀裂が入り、その後のホームパーティでもWinterがKyleを無視する場面が見られる。

この理由は明らかではないが、髪という点に着目すると、この対立の原因を推測することができる。作品の中盤まで Winter は長髪で登場するが、度々、髪の長さについて言及される場面がある。Winterの家で、彼とKyleが食事をしていると、兄Terranceが彼の前髪を撫でる場面がある。また、Kyleとともに軍隊に拘束される場面では、ある兵士に "pretty boy, Mr. hair curl" と尋問される。その後、Winterは髪を切り、友人たちからも距離を置いていることが示唆される。この文脈において、髪を切るという行為は、抑圧されるティーンネイジャーであることをやめ、強い自我を発達させる段階にあることを示している。しかし、同時に髪を切るということは、今まで属していた集団やアイデンティティの居処を断ち切るということであり、そのためにKyleに対する暴力が要請されたのである。つまり、WinterとKyleの不和の根源には、髪を切るという行為を通して、抑圧からの解放と自我の発達が見られるのである。 "cul-de-sac" の状況におかれた一人のティーンネイジャーがそこから抜け出す様子を、第三者の目線から描いた映画だと措定することができるだろう。

この短編映画には明確なストーリーラインがなく、かつ謎の軍隊が駐留する理由も明かされないが、ここで重要なことは、あくまでもこの映画はWinterをめぐるKyleの物語であるということだ。これは、*Scenes from the Suburbs* がWinterとKyleの物語であり、郊外の社会的立ち位置の変化といった外部的な要因を積極的に投射していないことを強調する。これ

は私的な友情とその亀裂の記憶であるのだ。そして、この短編映画の物語は、"The Suburbs" と "Suburban War" というアルバム内の二曲と強い関わりがある。

4．私的な記憶と公的な風景をめぐって―― "The Suburbs" と "The Suburban War"

The Suburbs 全体のテーマを強く反映しているのは、やはりタイトルトラックの "The Suburbs" だろう。その一方で、"The Suburbs" の歌詞の一部が用いられている "The Suburban War" も、アルバムのひとつのハイライトだといえる。よって、本節ではこの二曲を中心にアルバムの歌詞を読解していく。

"In the suburbs, I, I learned to drive/ And you told me we'd never survive" から始まる "The Suburbs" は、自動車のイメージを経由することで、自立しつつあるティーンネイジャーを描写している。前述したように、自動車は住宅と並んでアメリカン・ドリームの具象であると同時に、ティーンネイジャーにとっては、郊外から都市への移動を可能にするツールでもある。逆にいえば、自動車の運転ができるようにならなければ、退屈な郊外の生活を "survive" することはできないのである。さらに、この曲の歌詞で重要な点は、語り手は現在の視点から過去を回想していることである。これは *Scenes from the Suburbs* の冒頭で、"I wish I could remember every little moment. But I can't" (00:46) と語られていることと深くつながっている。想起が困難であることによって、郊外についての神秘化され美化された記憶が "Under the overpass in the parking/ lot we're still waiting./ It's already past" というフレーズに向かっていく。しかし、すでに過去のものだと知りながらも、陸橋や駐車場で過ごした記憶の中にとどまる語り手は、続いて "so move your feet/ from hot pavement and into/ the grass 'cause it's already past" と語り、ティーンネイジャーの記憶を象徴する熱い歩道から、芝生付きの住宅を持つ大人の世界へ足を踏み入れる。かつて自身が郊外で過ごしたときには、"by the time that the first bombs fell/ we were already bored" というほどの退屈さだったが、今ではノスタルジーの場として郊外を捉えている。その証拠に、娘が生まれたならば、"some beauty, before all this/ damage is done"を見せたいと歌い、残滓的な美としての郊外を提示している。こうしたノスタルジーは、語り手の内面で、退屈の象徴としての郊外が美的な性質を帯びた郊外に変化を遂げたことの現れである。

郊外をめぐる現在と過去の私的な記憶が混在する "The Suburbs" だが、歌詞の中には、郊外の低迷を示唆するように、"When all of the walls that they/ built in the 70's finally fall./ And all of the houses they built in/ the 70's finally fall" という一節がある。1970 年代に建築された壁と家が崩壊したということは、まさに 1970 年代以降に建設されたスプロール型の郊外様式が、Win が育った 1990 年代、あるいはアルバム制作時の 2000 年代の時点で崩壊しつつあることを示している。また、"Sprawl II (Mountains Beyond Mountains)" では、"Living in the sprawl./ The dead shopping malls rise/like mountains beyond mountains/ and there's no end in sight" と歌い、郊外の没落を描写している。その一方で、"Wasted Hours (A Life That We Can Live)" と "Month of May" の "First they built the road,/ then they built the town./ That's why

we're still driving/ around and around/" という部分では、スプロール型の郊外風景の誕生が示唆されている。要するに、このアルバムの背景には、1970 年代に発展していったスプロールの町並みの誕生から、郊外文化が大きな変化に晒されている現在の状況まで、幅広い年代の郊外が反映されているのである。[7]

私的な領域を脅かす外部の出来事として、*The Suburbs* は経済の問題にも言及している。例えば、"Ready to Start" の "If the businessmen drink my blood/ Like the kids in art school said" というフレーズは、血が若者の才能や熱意、金銭の隠喩として吸い上げられていくことを揶揄している。また、"City with No Children" の "You never trust a millionaire" では資産家に対する不信を表現し、"Half Light II (No Celebration)" の "When we watched the markets crash,/ the promises we made were torn" では、まさに市場の破綻によって困難になった約束＝アメリカン・ドリームの実現を描写する。"The Suburbs" や "Wasted Hours (A Life That We Can Live)"、"We Used to Wait" といった私的な記憶についての楽曲がリアリティをもって迫ってくるのは、郊外そのものの地位の低下や経済状況の悪化などの現実世界の出来事を、アルバムの世界に取り込んでいるためだ。現実の出来事が着実に組み込まれた *The Suburbs* は、1970 年代のスプロール的風景の拡大から 2010 年までの郊外を描いた記録でもあるのだ。

"The Suburbs" が私的な記憶と公的な出来事を同時に描くことで、アルバムの重層的に構築された世界を示すリードトラックだとすれば、より私的で内面的な記憶に焦点を当てた曲が "Suburban War" である。この曲の背景は、"The Suburbs" と同様に、1970 年代以降に形成された郊外が徐々に変化していた時期であるとともに、Win Butler の自伝的な面が反映されているならば、彼がヒューストン郊外の The Woodlands で過ごした 1990 年代前半だと考えられる。この時代の The Woodlands で注目すべき出来事としては、独立学区 (Independent School District) の再編が挙げられる。1992 年にはヒューストン近郊の Magnolia と Conroe の独立学区が再編され、The Woodlands が Conroe 独立学区に編入された。[8] この出来事を想起させるように、*Scenes from the Suburbs* でも学区と通学の問題について、Kyle や Winter らが話す場面がある。また、1994 年には大型のショッピングセンターが相次いで The Woodlands に建設されている。[9] こうした郊外の再開発の流れは "Suburban War" にも反映され、ヴァース 1 では、"This town's so strange, they built/ it to change, and while we sleep/ we know the street get rearranged" と夜の間に変化していく町の様子を描き出している。この不自然な変化において、郊外の再開発が背景として反映されているだけではなく、夜に変化が起きていることが最も重要である。夜はアルバム全体でも反復的に現れる単語であるうえに、*Scenes from the Suburbs* では夜に町の境界を越えた Kyle と Winter が兵士に捕まってい

[7] 郊外を扱った研究は、スプロール型の郊外が多額の維持費を必要とすることを指摘している。そのため、設備の補修よりも大規模な開発が好まれる。Andres Duany および Leigh Gallagher を参照。

[8] "History of the Woodlands" には、"The Woodlands is united in the Conroe school district" とある。

[9] ショッピングセンターの建設と同時期に、The Woodlands の人口は 4 万人を超え、その 3 年後の 1997 年には人口は 5 万人を突破している。"History of the Woodlands" を参照。

る。こうした点を鑑みると、このアルバムにおける夜は、成熟した大人の権威の象徴であるとともに、ティーンネイジャーには接近できず関与できない世界が自らの町に明確に存在することの反映でもある。[10] ゆえに、この曲における "Suburban War" とは、夜の世界、つまり成熟した大人の領域に対する戦争なのである。

前述したように、郊外における戦争は、町と町の利害対立や、より細分化された地域や住民同士の間に起きた感情的なもつれをも多義的に含んでいる。しかし、 "Suburban War" で示される戦争は、語り手の友人が夜の世界に対して仕掛けた個人的な戦争である。曲の冒頭は、 "Let's go for a drive/ and see the town tonight" で始まり、さらに中盤では、 "The Suburbs" の歌詞を "In the suburbs I,/ I learned to drive, and you told me/ we'd never survive, so grab your/ mother's keys we leave tonight" と一部引用している。ここで注目すべきは、"The Suburbs" では "Grab your mother's keys/ we're leaving" であるのに対し、 "Suburban War" では "we leave tonight" と "tonight" が追加されている点である。夜の町へのドライブは、ティーンネイジャーの目線から日常的に見ることができない世界、つまり非日常的な大人の世界を見に行くことである。昼と夜の区別は、ティーンネイジャーが未成熟と成熟の狭間にあることを示しているとともに、彼ら/彼女らを未成熟の世界にとどめようとする権威性を表している。この権威性に対する挑戦が、語り手の友人が始めた "suburban war" である。しかし、 "But you started a war/ that we can't win. They keep erasing all the streets we grew up in" と歌われるように、この戦争は失敗に終わることが自明である。仮に戦争を仕掛けたとしても、町は自動機械のように姿を変え続けるからだ。

この郊外戦争の背後には、おそらく成長に伴う嗜好や関心の変化があると推測できる。それまでの語り手と友人の関係性は、 "You grew your hair, so I grew mine" と歌われるように親密であったが、 二度歌われる "Now the music divides us into tribes" というフレーズが示唆するように、音楽がそれまでの友人関係を分断している。ここでは音楽が取り上げられているが、おそらく成長に伴ってさまざまな嗜好や関心が徐々に変化していったと推測できる。その過程で、 "With my old friends I can remember/ when you cut your hair,/ I never saw you again" と歌われるように、語り手と友人は決定的に異なった集団に属することになり、結果的に、会うこともなくなっている。[11] 成長とともに発生する友情の断絶によって、両者は "You choose your side,/ I'll choose my side" というように明確に分断され、現在までその状態が続いていることが示される。

しかし、語り手の郷愁的な視線は、"The Suburbs" で歌われた郊外そのものだけではなく、友人たちにもまた向けられている。友人が郊外の戦争を始めた日から月日が流れたことを示唆しつつ、語り手は "Now the cities we live in could be/ distant stars and I search for you/ in

---

[10] *Scenes from the Suburbs* の序盤で、謎の軍隊は夜間に住宅の捜索や市民への尋問などを行う一方で、日中は町を隔てる境界を単に護衛する姿が描かれる。しかし、後半になると、日中にも住民を射殺するなど、軍隊の圧力が強まる様子が示唆的に描かれる。

[11] このフレーズは、友情の断絶を示すものでもあるが、髪を切るという象徴行為を通じて、*Scenes from the Suburbs* の世界観がアルバムと地続きであることも同時に提示する。

every passing car" と通過する自動車の中に友人たちの姿を探している。さらに、"the/ night's so long. I've been living/ in the shadows of your song" と続けている。類似した表現が "Ready to Start" でも "I would rather be wrong than live/ in the shadows of your song" と用いられており、郊外のある一時期を過ごした友人たちに対するノスタルジーがアルバムの全体にも散りばめられている。その後、"Suburban War" の最終部では、"All my old friends,/ they don't know me now./ All my old friends/ are starting through me now" と歌われ、昔の友人たちと語り手の距離と、彼ら/彼女らの存在が語り手自身を通して語られていることが示される。"Wasted Hours" で "we're still kids in buses/ longing to be free" と歌われるように、語り手は現在も自身が育った郊外の記憶に囚われている。しかし、その記憶は語り手の中に固定されたものである。そのため、町の風景も昔の友人の姿もすべては、語り手が郊外で過ごした期間を反映することしかできず、その後の変化については触れられることなく、"distant stars" のように遠い存在であるのだ。

"The Suburbs" と "Suburban War" はアルバム全体のハイライトであり、アルバム全体と *Scenes from the Suburbs* の世界観を余すことなく伝えている。両者は郊外の環境が変化していく様子を織り交ぜながら、郊外をめぐる私的な記憶をノスタルジーとともに映し出している。特に、生まれ育った場所の回想は、郊外で育った人のみならず、多数の共感を呼ぶだろう。しかし、Arcade Fire は美化された郊外を歌うだけでなく、郊外の経済格差や持続不可能なインフラ設備といった問題にも批判意識を向けている。*The Suburbs* は、映像と音楽、歌詞を重層的に組み合わせることで、決して Win Butler だけの郊外ではなく、より抽象的で象徴化された郊外を構築している。これは、一方で、Arcade Fire がそれ以前の二枚のアルバムでも構築してきた "a slice of American life" (Leas) の最もアメリカ的な側面を強調しながら、他方では、それ以降に発表された *Reflektor* と *Everything Now* を踏まえても、最も普遍性をもったアルバムであることを示しているだろう。

5．*The Suburbs* の 10 年、アメリカの 10 年

The Suburbs から 10 年あまりが経過し、郊外の風景は変化し続けている。この 10 年で郊外と都市をめぐる関係性も大きく変化し、富裕層は高級化した都市部に住み、1950 年代に白人中産階級が中心を占めていた郊外には低所得層や多数のエスニックグループも居住するようになりつつある (Nijman)。また、ロバート・パットナムは自身が育ったオハイオ州ポートクリントンやアメリカのその他の都市や郊外を例に、「均質な富裕居住地域、あるいは均質な貧困居住地域のどちらかに住む家族がますます多くなっていった」ことを示し、アメリカン・ドリームが志向する機会均等は経済格差によってすでに失われていることを検証している (49)。こうした経済格差が広がっていく中、トランプが大統領を務めた 4 年間で、アメリカン・ドリームに取り残されたホワイト・トラッシュと呼ばれる貧困層に属する白人たちや、ヒルビリーと呼ばれる人々の存在が表面化し、移民や人種に対する差別

意識や経済格差に対する不満が種々の分断を炙り出した。[12] しかし、ホワイト・トラッシュもヒルビリーも決して突如として出現したわけではない。[13] ホワイト・トラッシュを知るためには400年も遡る必要はなく、2002年の映画『8マイル』の主人公で後のEminemが、トレーラーハウスで暮らすJimmyという名のホワイト・トラッシュであったことを思い出せばよい。[14] つまり、2002年の時点で、貧困層の白人はすでに約256億円の成功を収めた映画において可視化されていたのだ。デトロイト内部の8マイル (13キロ弱) ほど離れた場所には、白人と黒人を、さらに富裕層と貧困層を隔てるラインが存在している。これはラスト・ベルトという特殊な背景があるにせよ、パットナムの研究を踏まえると、郊外と都市の両方で貧富の拡大がすでに存在したことを示している。

機会均等という観点から考えたとき、郊外の住宅はアメリカン・ドリームの要件を満たすものだった。しかし、2021年1月現在、住宅価格の平均はサブプライムローン問題が表面化する直前の2005年以上に上昇しており、アイダホ州・ネヴァダ州・ユタ州・アリゾナ州・ワシントン州では、2011年以降で住宅価格が100%以上上昇したことを示している(Richardson)。新型コロナウイルスの流行によって住宅の需要が増加したという理由があるにせよ、この上昇は、経済的な格差が現在進行形で浮き彫りになっていることを明確にしている。この価格上昇に都市部の高級住宅も含まれていると考えると、それは都市部と郊外における富裕層と貧困層をこれまで以上に分断することにもつながる。

The Suburbs で歌われた郊外のノスタルジーは、1970年代を起点に変化してゆく郊外が舞台だった。Arcade Fireが *The Suburbs* で歌ったものとは、まさにこの変化であっただろう。そして、このノスタルジーの中に隠された格差と分断の徴候は、まさに2010年の時点ですでに可視化されていた。この10年の間に、ウォール街では全体の1%の富を持つ人々が非難されたかもしれない。アフリカン・アメリカンの構造的差別の解消が叫ばれたかもしれない。しかし、郊外の未来を蝕む機会平等の格差はまだ訴えられていない。*The Suburbs* で歌われた郊外を、不平等と格差の象徴ではなく、ノスタルジーの場として回顧し続けられる未来は、私たちの手に委ねられている。

引用文献

Adams, James Truslow. *The Epic of America*. 1931. Routledge, 2017.

---

[12] ホワイト・トラッシュについてはナンシー・アイゼンバーグを参照。ヒルビリーについてはJ. D. Vanceを参照。

[13] 2010年公開の映画『ウィンターズ・ボーン』は、ミズーリ州のオザーク高原に住み、違法薬物の密造に手を染めるヒルビリーを題材にしている。この作品は第83回のアカデミー賞で作品賞を含む4部門にノミネートされていることから、広く認知されていると考えられる。さらに、オザーク高原は、2017年から始まったネットフリックスのドラマシリーズ『オザークへようこそ』でも取り上げられており、貧困と麻薬犯罪の中心地といったステレオタイプはむしろ強化されていると思われる。

[14] 『8マイル』と白人貧困層の関係については、本研究科の小倉永慈氏に貴重な意見を頂戴した。感謝申し上げる。

Arcade Fire. *The Suburbs*. 2010.

—-. *The Suburbs: Scenes from the Suburbs*. 2011.

Bogost, Ian. "Revenge of the Suburbs." *The Atlantic*, 19 June 2020, https://www.theatlantic.com/technology/archive/2020/06/pandemic-suburbs-are-best/613300/. Accessed 14 Jan. 2021.

Celeste, Ng. *Little Fires Everywhere*. 2017. Little Brown, 2018.

Cottingham, Chris. "Suburban Hymns - Arcade Fire Interview." *Clash*, 11 Aug. 2010, https://www.clashmusic.com/features/suburban-hymns-arcade-fire-interview. Accessed 16 Jan. 2021.

Dombal, Ryan. "Arcade Fire Talks *Scenes from the Suburbs*." *Pitchfork*, 5 Apr. 2011, https://pitchfork.com/news/42108-arcade-fire-talk-scenes-from-the-suburbs/. Accessed 9 Jan. 2021.

Duany, Andres, et al. *Suburban Nation: The Rise of Sprawl and the Decline of the American Dream*. anniversary ed., North Point, 2010.

Eugenides, Jeffrey. *The Virgin Suicides*. 1993. Picador, 2015.

Gallagher, Leigh. *The End of the Suburbs: Where the American Dream Is Moving*. Portfolio, 2013.

George, Joseph. *Postmodern Suburban Spaces: Philosophy, Ethics and Community in Post-War American Fiction*. Palgrave Macmillan, 2018.

Hanlon, Bernadette. *Once the American Dream: Inner-Ring Suburbs of the Metropolitan United States*. Temple UP, 2010.

Heiman, Rachel. *Driving After Class: Anxious Times in an American Suburb*. U of California P, 2015.

"History of the Woodlands." *Chron*, 30 July. 2013, https://www.chron.com/neighborhood/woodlands/news/article/History-of-The-Woodlands-4696126.php. Accessed 20 Jan. 2021.

Leas, Ryan. "*The Suburbs* Turns 10." *Stereogum*, 31 July. 2020, https://www.stereogum.com/2093043/arcade-fire-the-suburbs-10-year-anniversary/reviews/the-anniversary/. 22 Jan. 2021.

Morley, Paul. "Keep the Faith." *The Guardian*, 18 Mar. 2007, https://www.theguardian.com/music/2007/mar/18/popandrock.features11. Accessed 20 Jan. 2021.

Nicolaides, Becky and Andrew Wiese. "Suburbanization in the United States After 1945." *Oxford Research Encyclopedia of American History*, 26 Apr. 2017, https://oxfordre.com/americanhistory/view/10.1093/acrefore/9780199329175.001.0001/acrefore-9780199329175-e-64?rskey=UmY8Df. Accessed 14 Jan. 2021.

Nijman, Jan. "American Suburbs Radically Changed over the Decades—and so Have Their Politics." *The Conversation*, 29 Oct. 2020, https://theconversation.com/american-suburbs-radically-changed-over-the-decades-and-so-have-their-politics-147731. Accessed 23 Jan. 2021.

NME blog. "Grammy Awards Fallout - Who the Hell Are Arcade Fire?" *NME*, 15 Feb. 2011, https://www.nme.com/blogs/nme-blogs/grammy-awards-fallout-who-the-hell-are-arcade-fire-778521. Accessed 8 Jan. 2021.

Payne, Chris. "6 Times Alternative Won Big at the Grammys: From Arcade Fire to 'Bonny Bear.'" *Billboard*, 13 Feb. 2021, https://www.billboard.com/articles/news/grammys/6875188/grammys-alternative-indie-arcade-fire-beck-alabama-shakes-courtney-barnett/. Accessed 9 Jan. 2021.

Richardson, Brenda. "Housing Markets Gains More Values in 2020 than in Any Year Since 2005." *Forbes*, 26 Jan. 2021, https://www.forbes.com/sites/brendarichardson/2021/01/26/housing-market-gains-more-value-in-2020-than-in-any-year-since-2005/?sh=2fb61de4fe08. Accessed 27 Jan. 2021.

Vance, J. D. *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis.* 2016. William Collins, 2017.

アイゼンバーグ, ナンシー. 『ホワイト・トラッシュ——アメリカ低層白人の 400 年史』東洋書林, 渡辺将人監訳, 2018 年.

パットナム, ロバート. 『われらの子ども——米国における機会格差の拡大』創元社, 柴内康文訳, 2017 年.

『8 Mile』(*8 Mile*). カーティス・ハンソン監督, ユニバーサル・ピクチャーズ, 2002 年.

『ウィンターズ・ボーン』(*Winter's Bone*). デブラ・グラニク監督, ロードサイド・アトラクションズ, 2010 年.

『オザークへようこそ』(*Ozark*). ジェイソン・ベイトマン監督, ネットフリックス, 2017 年.